



会員寄稿

計画力と実行力の両立についての 考察

オリジナル設計株式会社／施設本部／東日本施設部／施設3課 真島佑介



はじめに

我々の所属する『水環境コンサルタント』という業界には、下水道の全体計画、管渠設計、土建・機電といった施設設計、システム開発、それらの技術者たちを支える総務・業務係etc…多様な分野の専門家が日夜、各々の専門知識をフル活用して業務に取り組んでいます。前職が「マンションの設計事務所」という建築に特化した業界に身を置いていた私にとって、一つの空間に多様な専門的な考え方や価値観が混在しているという状況は、とても新鮮で刺激的に感じられ、日々のプロジェクトに取り組む中で、物事の考え方や設計のアプローチが一本道ではないことを痛感しています。

その一方で、物事を進めていくにあたって、前職でも同様に要求される普遍的な要素があることに気づきました。それは『計画力』と『実行力』です。PDCAサイクルにも登場するこのふたつの要素について、今回は、考えたいと思います。

CASE1. 当社施設本部のフリーアドレス化

平成28年に私の所属する部署はオフィスのフリーデスク化を実施しました。私は建築職としてプランニングや家具の選定等を担当するメンバーとして、ワーキンググループに参加しました。

フリーデスク化の話が挙がった当時は、一人につき、広さ3帖弱の空間と専用のデスク、袖机、書類棚があてがわれていました。デスクはいい意味で重厚感がある、悪い意味でやぼったいものが使われており、社員は書類がうずたかく積まれた中で、仕事をしている状況でした。フリーアドレス化にあたり個人のスペースをすべて取っ払い、フロア全体を社員全員が自由に使えるようにすべく、共用のデスクと、書類や私物を補完するための小さなロッカー（個人専用）をレイアウトしなおす必要があります。計画するにあたり考えたのは、オフィス内に多様な働き方ができる場を設けること（個人で集中して打ち込む作業や、多人数での打合せ、チームで集まって業務を取りまとめていく作業など）と、今までの重たいイメージを払拭することでした。



写真-1 フリーデスク化前の社内の様子

プランニングから、新設什器の見積もり徴取、予算調整等の段取りは通常の業務と変わりません。仲間たちと協力しながら計画を進め、上長の理解もあり、無事承認を得る運びとなりました。

と、ここまでは『計画力』の話。今度はそれを実現する『実行力』が問われる場となります。業務を行いつつのレイアウト変更は想像以上に大掛かりで大変なものでした。ワーキンググループのリーダーの陣頭指揮のもと、若手社員を巻き込み、ベテラン社員の理解を乞い、社員一丸となつての什器の大移動や、書類の大処分、カーペットを剥いでの配線作業を実施しました。スピード感のある作業でした。



写真-2 現在の社内の様子

レイアウト変更実行の場での私は、それまでの提案段階のポジションとは打って変わって、指示されるままにひたすら動くのみで、作業完了のときには「気づいたら終わっていた」というのが正直な感想でしたが、仲間と

協力して作業を完了させたという爽快感があったのを覚えていてます。

オフィスがフリーアドレス化されて、間もなく3年が経過しようとしています。概ね好評な意見がもらえる中、否定的な意見もちらほらある状況で、まだ最終形は見つかっておらず、その時々最善を目指して、これからも『計画』と『実行』を繰り返していくことだろうと思います。

CASE2. 真島家の引っ越し

ところで最近、業務とは全く関係のないシーンでこの『計画力』と『実行力』を痛感した出来事がありました。それは引っ越しです。CASE2では、今年の秋に行った、真島家の引っ越しに関わる一連の出来事についてご紹介したいと思います。

引越作業における『計画力』のみせどころ。物件の探索や家具の選定、不動産会社との交渉、家族へのプレゼンテーションがそれにあたります。まがりなりにも「建築職のコンサルタント」を生業としている私は、順調に上記の作業をこなしていきました。何度かの内見を終え、比較検討の結果、物件や引越しの時期が決まりました。よかったよかったと安堵するもつかの間、引越しには避けては通れない『実行力』を要求される作業が私の前に立ちのびてきました。そう、梱包作業です。

日常生活と並行して行われる梱包作業には、「まだ使うかも?」「もう詰めちゃえば?」の想いが常に付きまといまいます。そのような思惑と仕事の忙しさを理由に箱詰め実行を渋る私を尻目に、妻はテキパキと梱包を完了していきます。結局、引越し日直前までほぼ梱包作業が進まなかった私の荷物は、妻の協力の元、前日に段ボール箱の中に吸い込まれていきました。



写真-3 荷物の山の中でお茶を飲む娘

そんなこんなで迎えた引っ越し当日は案の定バタバタでした。小雨そぼ降る中、筋骨たくましい引っ越し業者の方々に混じって、荷物を運ぶ私の姿がそこにありました。妻は娘の相手をしつつ、的確にアドバイスをくれ、

搬入は着々と進んでいきます。およそ半日間の怒涛の作業が終わったところで、軽い疲労感と心地よい爽快感のなかで、私はふと気づきました。

「そうだ、これは会社のレイアウト変更工事のときと同じだ！妻はまさにワーキンググループのリーダーで、私はまた『実行力』をほとんど発揮できず、ただただ、体を動かしていただけなのだ。」と。

フリーアドレス化の作業における仲間の存在と同様に、引っ越しの作業も家族による実行するため指示・協力があってこそのものでしたのです。

新居での生活が始まり数日が経ちましたが、今も我が家には、まだ梱包されたままの荷物たちがそこかしこに置かれています。私が『実行力』を発揮し、引越しが完了するのはいつになるのか、当初目標としていた時期はすぐそこです。これをこれからの『実行力』を磨く第一歩として、取り組んでいこうかと考えています。



写真-4 新居に眠る開梱を待つ荷物たちの一部

おまけのエピソードをひとつ。

引っ越し業者が引き上げ一息ついていたところ、リビングから物音がするので駆け付けると、新調したソファの背もたれ部分を分解し、すべり台にして遊ぶ娘の姿が



写真-5 自作のソファ滑り台で遊ぶ娘（再現）

そこにはありました。思いついたらすぐ行動に移すその姿勢に、私は「これも『実行力』だな。」とひとり親バカ発言に浸ってたところ、そのしばらく後、3回ほど滑ってみた娘が、「ぜんぜんすべんなあーい」と己の『計画力』の不備を瞬時に見極め、別のおもちゃで遊び始めたのを見て、切り上げる『実行力』に感嘆し、これは僕の遺伝子ではないんだろうなあと感じていました。

おわりに

このふたつのエピソードを振り返って、以下のみつつの事項を再認識しました。

- ・『計画力』と『実行力』は両立してこそ、意味があること
- ・物事を進め、決着させるためには協力が必要であること
- ・自分には『実行力』が不足しがちであるものの、それを補って余りある存在が周囲にいること

令和二年を、また、これから来る委託案件の納期ラッシュを迎えるにあたり、その両輪の大切さを再認識しつつ、『実行力』も備えた大人になるべく、業務に、私生活にと真っ向から取り組んでいきたいと改めて考える今日この頃です。



会員寄稿

水コンサルタントの最高到達点を 目指して。

日水コン/下水道事業部/名古屋下水道部/技術第一課 蝶名林郁也



1. はじめに

はじめまして、日水コン下水道事業部 名古屋下水道部 技術第一課の蝶名林です。今回の水神会員寄稿（中部支所）では、私がこれからの時代の水コンサルタントの最高到達点に向けて普段の業務以外で、チャレンジした経験や体験について紹介していきたいと思います。

2. Water Wise Innovation Challenge!~Mission for Phnom Penh Cambodia~(主催:Japan -YWP)

1) Japan-YWPとは

「Japan National Young Water Professionals (Japan-YWP)」は、International Water Association (IWA) 日本国内委員会 (IWAの日本支部) の下部組織として2010年3月に設立され、日本水環境学会・日本水道協会等と密接な連携をとりながら、上下水道・水環境に関連する分野の学術的研究・知識の普及・水環境保全への積極的な貢献を目的とした若手中心の組織です。教育・研究機関、官公庁・自治体、民間企業に所属する水関連の若手が広く集まることで、分野・職種間の交流を促進し、水問題に関する様々な情報交換を行うプラットフォームを構築しています。また、他国のYWPとも交流を行うことで、若手の国際ネットワークを広げている団体です。

(参考：<http://www.japan-ywp.site/>)

2) Water Wise Innovation Challenge!~Mission for Phnom Penh Cambodia~のイベント詳細と参加報告

私が参加したイベントは、「SDG 6に掲げる持続可能な水環境の達成に向けて、カンボジア国プノンペンを対象として、若手が革新的なアイデアを競うイベント」に日水コンの下水道事業部名古屋下水道部の若手チームで参加してきました。このイベントではまず初めに、自分たちのアイデアのアブストラクトをA4 1枚にまとめて提出し、審査を通った上位6チームが、英語の口頭発表にて、カンボジア政府の方々に対して15分のプレゼンテーションを行うといったものでした。そこで、僕たち名古屋若手チームは、社会人チームとして唯一上位6チームにノミネートされ、京都大学で口頭発表を行い、

Water-Wise Innovation Awardを受賞しました。

3) イベント参加の経験・感想

私がこのイベントに参加して、最も価値のある経験として得られたことは、「情報インプットとアウトプットの多様性」です。本イベントでは、カンボジア国プノンペン都の水環境改善を目的としたものであり、弊社の海外事業部の方から現状をヒアリングや過去の水事業の傾向からそれらに付随するトラブルを調査していく中で、問題の多くは下水道事業の普及率の低さが原因の一つであることが分かりました。しかしながら、本チームとして解決方法は、下水道の普及ではなく、既設の排水路に投棄されているゴミが排水機能を閉塞していることの方が重大な問題であることであると考えました。これらのことから問題解決に向けての考え方として、より多くの情報を収集・調査することで問題の本質に近づくことが可能となり、その問題の本質を解決案として、そこに住む



写真-1、2 名古屋若手チーム・発表風景

方々に有意義になることを考えることがコンサルタントなのではないかと考えることが出来た経験でした。

3. 下水道展'横浜

1) 下水道展とは

下水道事業の管理者である地方公共団体等を対象に、全国の下水道関連企業（団体）の技術開発の成果に基づき、下水道に関する幅広い分野の最新技術・機器等を展示、紹介するとともに、一般の方々に下水道について理解と関心を持っていただくことを目的として毎年開催している国内最大規模の展示会です。国際競争力のある技術開発と普及展開が提唱されるなど、水ビジネスの国際的な状況も変化しています。下水道展では、日本の下水道の「世界ブランド化」をめざし、海外からの来場者と出展誘致も積極的に図っていきます。また、企業（団体）の技術・機器等の紹介の場である出展者プレゼンテーションや下水道施設内の設備・機器等を見学するテクニカルツアーなどの併催企画と、一般市民に対する展示・イベントなどもあわせて実施しています。（日水コンとしては、2017年の東京開催時より2度目のブースを出展）（参考：<https://www.gesuidouten.jp/gaiyou/index/>）

2) 日水コンブース概要：あなたと新たな下水道の未来を創る

日水コンでは、過渡期を迎えた下水道事業に対する当社のコンセプトは『あなたと新たな下水道の未来を創る』です。今までにない、新たな下水道のイノベーションに繋げるために、これまで培ってきた「技術」とそれを支える「人」に焦点を当てました。ブース構成にあたっては、「あなた」の一人である女子美術大学の皆さんとコラボしました。豊かな感性から新たな価値を創造するため、アートシンキングを下水道に取り入れる、という挑戦です。また、それらのアート作品とは別に出典コンテンツとして、「人」「技術」「イノベーション」の観点からパネル等によるコンサルタントの仕事内容や技術を社外に発進しました。その中で、私は「人：若手社員の日」として、主に学生向きに水コンサルタントとしての仕事ぶりについて紹介するパネルを出典しました。

3) イベント参加の経験・感想

本イベントに参加させていただき、会社が発進するアート下水道から「他業種との融合の無限の可能性」について感銘を受けました。前項にあるように今回の下水道展で発信したアート下水道では、下水道事業に一見関係ないように感じる美術関連の大学井とのコラボレーションから、成熟（新設から維持管理が主になってきている）に向かっている国内の下水道事業にアートシンキングを加えることで、革新や新たな発展を見込むものでした。

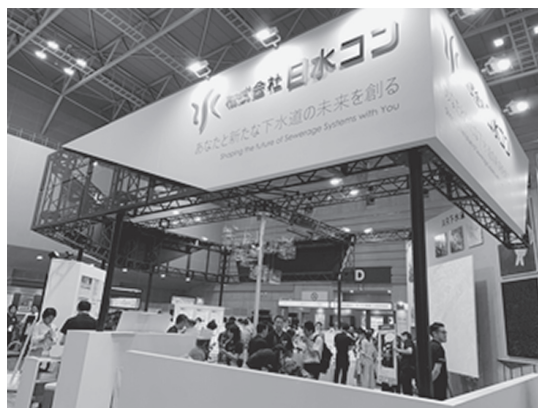


写真-3、4 日水コンブース・発表パネル

(>私の発表パネルは、アートシンキングよりもインパクトを重視したものになっておりましたが、VRゴーグル装着でのコンサルタント体験動画は、非常に好評でした。)

元来のライト兄弟により飛躍的に発展を遂げた飛行・航空産業においても、テクノロジー（空気抵抗や発射角度）×アート（機体デザイン）を掛け合わせる事が重要なファクターの一つであったと考えられます。

現状の国内の主な設計・計画業務に直結する形でこれらの「テクノロジー×アート」の力が最大限発揮されることは未知数ですが、逆を返せば無限の可能性があると感じました。

4. 最後に

私は、日水コンに入社してから前述のイベントのほかにも多種多様な講習会や講演会等に参加させていただいております。その中で、国内の下水道事業の方向性が「新設施工から維持管理」「汚水排水事業から異常気象に伴う超過降雨の被害を抑える雨水排水事業」と事業体から発注される業務の転換期の中で、これからの水コンサルタントの技術者に求められる多様で柔軟な考え方を養っていかけてお感じております。これからもこれらの経験を基に将来自分の目指す「水コンサルタントの最高到達点」に向けて積極的（自主的）に参加していきたいと思っております。



会員寄稿

スイートデビル（嫁）との 15年の歩み

株式会社 松尾設計／公共設計部／水道グループ／課長 岡 秀俊



1. はじめに

昭和生まれ 昭和育ち 平成にはすでに社会人人生のスタートをきり、気付けば元号も新たに令和となった。

昨年、父を肺がんで亡くなった。

幼い頃から威厳にあふれ近寄りがたい存在だった父、晩年は母と寄り添い笑顔で助け合って生活していた。

働き者だった両親、一方、学生時代の私は家の事など顧みずに青春を謳歌して、社会人に成り立ての頃も甘い考えや自覚が足りずいわゆるその当時の～今時の若者～であった。

そんな私も昨年50歳になり責任のある仕事を任されるようになり、その中で家族の支えが私にとって大きかったと気づき、この結婚してからの15年の振り返りとともに仕事とプライベートとのバランスの取り方と年下A型嫁と自由人B型の自分との足跡をエピソード交えて振り返ろうと思う。

2. スイートデビル（嫁）はA型だった。

スイートデビルとは数歳年下のうちの嫁の事であり、自分で「小悪魔の魅力があるのよね」などと言っている。私的には鬼嫁気質と思っているので、ここではこう呼ぶ事にする。



写真-1 (スイートデビル デザインのブライダルブーケ)

一般的にA型の人は時間に厳しく、遠慮深く言葉を選んで堅実に行動する傾向があるそうだ（若干、当てはまらない気がするが）。

それに反して、B型は細かいことを気にせずに、気まぐれで移り気で自由奔放（典型的なB型気質の私）。

スイートデビルは興味がある事に関して、とことんまで妥協しない（花束制作にのめり込み実際に結婚式で使用されるブーケデザイン、作成まで上り詰めた）、一方、すぐ妥協する私、お互いの価値感の違いで衝突する事が結婚当初は多かった。

3. 夫婦げんかは犬も食わないか？

鬼ヶ島（我が家？）には、スイートデビルと私が結婚した年に、愛犬のハヤト（コーギー）が家族の一員として加わった。仕事で疲れた時、身も心もボロボロになりそうになった時、人間の言葉こそしゃべりはしないが、フワフワの毛と短い脚とまん丸な目で「お疲れ様」と労ってくれるのだ。

タイプが違い共通点の少ない私達夫婦の数少ない共通点

- (1) 犬が好き
- (2) 食べる事・料理が好き
- (3) 自然が好き（スイートデビルはフラワーコーディネーター）
- (4) 旅行が好き

4. 鬼のにぎりめし？

当初、共働きの私達は、共にキッチンに立つ事も多く、美味しい食事を作る過程を楽しんでいる。とある日スイートデビルから「あなたこれに応募してみない??」と提案された。

鬼ざらずではなくおにぎらず（四角い具入りおむすび）が流行った年だったと記憶している。

鬼ヶ島キッチンでは、いつも肉巻きを担当している私一般の部で一位を受賞した。

普段会社では、マウスを片手に設計に励み、家では包



写真-2 おにぎらずの具: オクラ、人参、豚肉の肉巻き(雑穀米) 断面の彩りを考えて作成 人参の赤 オクラの緑 雑穀米の鮮やかな色彩

丁を握り果物の皮を剥き不器用なスイートデビルの代わりにキッチンへ立ってきた自分への表彰状だと思っている。

5. 来年(達成予定の目標)の事を言えば鬼が笑うのか

数年前のある春の日、技術士試験の申し込み時期。仕事の合間の片手間でしか勉強していなかった技術士の資格を「今年こそは取る」とスイートデビルの前で宣言。庭の花の手入れをしながらスイートデビルは「今年こそ・・・ね」と呟いた。

「50歳までに技術士(上下水道部門: 下水道・上水道及び工業用水道の2つの科の資格を取る!)」背水の陣で望んだ試験。

休日には、会社の同僚から教えてもらった市の学習室で学生と一緒に、朝から晩まで資格試験勉強に励んだ。

元来図書館大好きなスイートデビルもお弁当を持って図書館へ足を運んでくれた。

合格の発表の日、パソコンを立ち上げ技術士会のホームページへ向かい合格者番号の一覧へ、私の番号は「・D0059」、合格の発表には、・D0001、・D0035、・D0066以上。

真剣に試験に取組んだため、試験の手応えもあった。しかし、番号が無かった。

そして、次の日に技術士会から試験の合否判定の通知が来た。落胆の面持ちで開封して私の目に飛び込んだのは、「合格通知」の2文字。判定は全てA判定であった。

昨日、慌てて番号を確認するあまり番号を縦読みしまっていたのだ。

だが、まだ、技術士の資格を手に入れた訳ではでない。ご存知の通り、口頭試験に合格しなければ、技術士として資格を手に出出来ない。

口頭試験の面接練習を会社の皆さん、家ではスイートデビルと妻のご両親が手伝ってくれた。そのおかげで、自分はこの資格を手に出出来たと思っている。

口頭試験も合格との結果をスイートデビルに電話にて

伝えるといつもの教育熱心な保護者のような口調から、別人かと思う程涙ぐんだ声で「本当に良かったね。早くお義母さん達に連絡してあげて」と消えそうな声で喜んでくれた。

6. 渡る世間に鬼はなし

前述したように、私とスイートデビルは旅行が大好きである。

だが私は学生時代から苦手とする英会話のイメージが強く海外に結婚するまで一度も行った事がなかった。

だが一方スイートデビルは海外生活の経験もあり、視野が広く文化・語学・宗教様々な角度から世界を考えている。(スイートデビル曰く) 彼女はいつも国籍や人種にとらわれず目の前の人達と交流するというポリシーを持っているらしく、海外=苦手な英語→日本が一番と思っている私にとって~世界~という扉を開いてくれた。

プライベートで様々な国へ行くうちに、結婚当初は行き当たりばったりの無計画だったが徐々に行動力のみで押し切るというB型気質の旅行から、綿密にスケジュールを立てて楽しむ旅行の楽しさを知る事になる。後にこれが仕事の面で、おおいに役立つ日がやってくる。



写真-3 ベトナム旅行での一幕(民族衣装が好きなスイートデビル)

会社で海外業務を行なうようになり、私にも海外での仕事を経験するチャンスが巡ってきた。語学(英語)に自信のない私は、語学の堪能なスタッフのサポートや海外業務経験者から様々なアドバイスをしてもらった。

初めての海外業務(アジア)。家では国の歴史や地理的な事、そこに暮らす人々の事をスイートデビルからレクチャーを受け、自分でも出発前に綿密にスケジュールリング

- (1) 訪れる目的地の順番、時間、手段
- (2) 通訳の方の手配

(3) いつ何を薦められても食べられるように(整腸剤の準備)

海外業務として8回(2週間程度×8回)海を渡った。この8回には、順調に行くこともあれば、様々なドラマもあった。

据え付けられているはずの機器が目の前に転がっており、設置されていない・・・等

現地の方曰く「搬入に手間取り予定通り行かなかった」と明るく言っている。

当初のスケジュール通りにはいかない事もあったが、概ね業務は問題無く終わることができた。

現地の方はとても親切で、訪問する度に親睦を深めようと食事に誘ってくださった。ご家庭の食事会に招いて頂き、手作りの菓草酒をお土産に持たせて下さった。今その当手を振り返ってみると仕事がスムーズにいったのも現地の方の協力、通訳の方々の協力のおかげである。

あのスイートデビルとも2週間合わない、寂しく感じ、一緒にいることの大切さを感じたが、その事は本人には伝えていない。

だが彼女の言っていた通りだった。×渡る世間は鬼ばかりではない。

本当は渡る世間に鬼は無し(国籍や人種関係なく人は真心で通じ合う事が出来る:嫁曰く)

7. 鬼の目にも涙

いつもの昼下がり、会社の同僚が北九州マラソンを完走し会社に出勤。「マラソンを完走するのは気持ちが良い。来年も走る」、それを聞いていた私も思わず「来年走ろうかな?」などと呟いたのが、まさか自分がマラソンを走る事になるとは・・・

実は、10km以上走った事も無く運動の習慣もないのが当時の現状だった。

スイートデビルからは、「もう若くないし、運動の習慣も無いのにそんな無茶な」と軽くあしらわれた。だがしかし翌日にはマニュアル大好きA型 文系気質の彼女は、本屋でなにやらHOW TO本を購入してお風呂で熟読していた。

私は42.195kmを完走するために、出場が確定した日からマラソン当日まで120日間、帰宅してから家の周辺をひたすら走った。

頭でっかちな奥様トレーナーと陸上経験のある同僚の的確なアドバイスにより、シューズや当日の持ち物など最低限の事は準備したのだが、不安材料は当日まで15km以上走ったことが無い状態で走らなければならないという危機的状況。

マラソン当日にスイートデビルからの一言「仕事に支

障が出たら困るので途中リタイヤするように」と。私もとりあえず、「体調見ながら判断する」と言い残し家を後にした。

沿道に応援に来るのかと思ったのだが、病み上がりの彼女は自宅で応援すると言っていた。最近はこの業界も近代化していてマラソンシューズに送られてきたチップを取り付け、そのチップでネット上にてランナーの位置検索が可能である。

そう彼女はハラハラしながら自宅で走る私を応援していたのだ。

(1) 走り始めは意外に順調で10km地点を通過

それは突然であった。18km地点で突然の足首の痛みがあり、立ち止まった。リタイヤすることをも視野に入れ始めたのだが、路上で応援して下さる方々と周囲のランナーの頑張りもあり、思いとどまり自分の限界まで走ろうと再び重い脚で一步を踏み出し続けた。

(2) マラソンの本に必ず35km地点で35kmの壁がランナーを苦しめると書いてあった。

30km地点の門司港に到着したが、脚がもはや限界か!? だがここまで走ってリタイヤは無い。走りきると心に誓った。

この頃には両親は「いつリタイヤした人達の乗るバスに乗ったのか?」という会話を交わしていたようだ。

(3) 足切りタイムとの戦い

何度も制限時間の足切りタイムのカウンタウンの危機をすり抜けて、意識も朦朧としながら這うようにゴール。完走したランナーの方の中で私は最後から3番目であった。

もはや順位など関係ない。今までに感じたことの無い達成感

(4) 鬼の目にも涙

スイートデビルは家で小さなスマートフォンの画面で夫は完走出来たのか?とこちらも長い一日を過ごしていたようだ。駅にスイートデビルと愛犬ハヤトが迎えに来てくれた。

きっと完走は無理だと思い、それでも落ち込まないよ



写真-4
愛犬から祝福のキス

写真-5
スイートデビルからの花束

うにと手作りの花束とメダルを持って来てくれたのだ。
私はこの日の事を一生忘れないだろう。

8. おわりに

亡くなった父親に特別な親孝行は出来なかったのだが、資格試験の合格や海外の業務評価・マラソンの完走などを両親は本当に喜んでくれた（最高の親孝行だと）。

そして、気付けば結婚当初はお互いの性格の違いや価値感の違いで衝突することもあった結婚生活も、彼女の生真面目と根底にある動物や植物に対する深い愛情に気付いてからは、お互いの長所を生かして、短所を補いながら少しずつ変化していった。

そう鬼ヶ島（マイホーム）は鬼ヶ島パラダイスへと。

彼女が私に、決して自分だけでは経験する事のない世界を見せてくれる事により、私は無意識のうちに気分転換し明日の仕事に備えていたのだ。

一緒に美味しい物を食べて、テレビを見て笑い、旅行の計画を立てて、公私共々大変な時も寄り添い、知らず



写真-6 ハウステンボスにて

知らずのうちに本当の家族になっていたのだ。

縁の下の力持ちのスイートデビル、思い起こせばあの時もこの時も一言多いが、支え続けてくれたのだ。

「これかも笑顔の絶えない家庭でいよう」と心からそう思う。